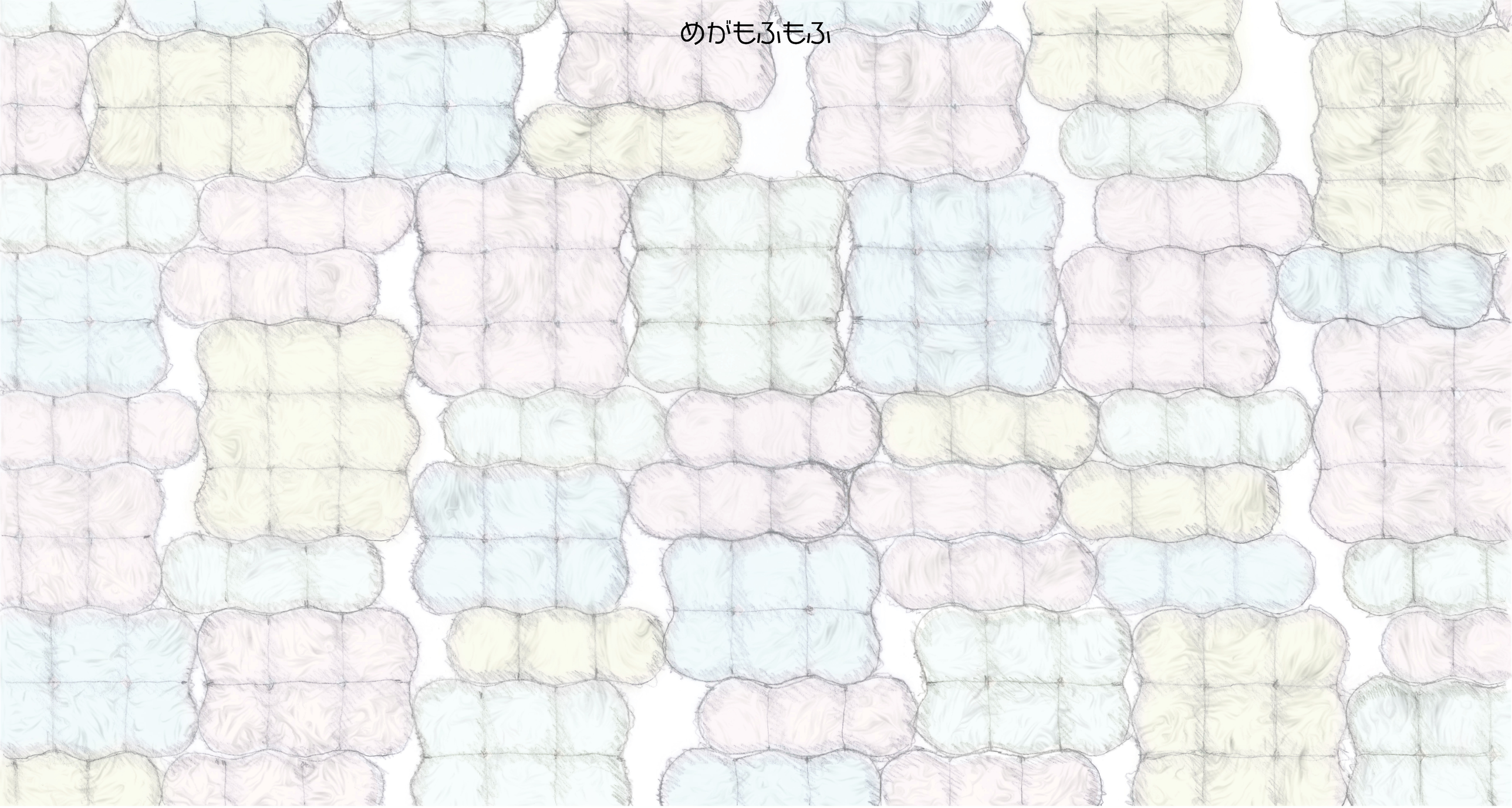
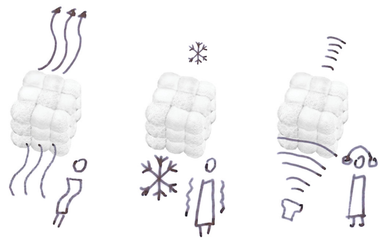
めがもふもふ

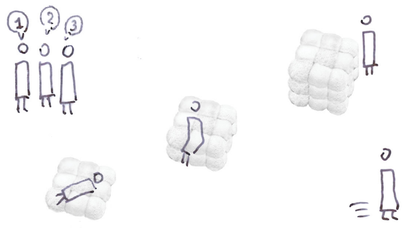


先人たちはガラスという素材に透過性と反射性、ブロックという形に頑丈さと硬さを求めて来た。コンパクトで重く、透明な硝子ユニットは液体状のケイシャ、石灰石とソーダー灰を固体化した塊だ。そこで、かわいいガラスブロックを仕上げる為に、軽さ、大きさ、ふわふわ感を吹き込む。

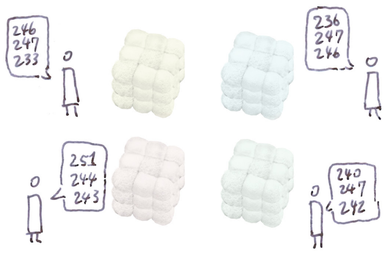
素材を再考慮し固体から繊維状の硝子に変える。ふわっとしたガラスウールをガラスファイバーで縛ってまとめたブロック、"めがもふもふ"は従来のガラスブロックの1/100もの密度になる。よってサイズも既存より10倍に設定し、子供様の大きいサイコロおもちゃのような親近感を得る。



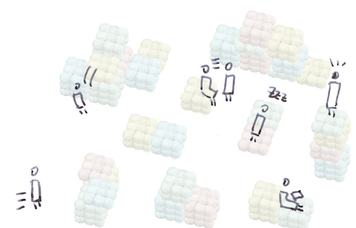
ふわふわなキューブは風を通しつつ、断熱性、吸音性にも長けており、温かい存在感を醸し出す。クリアでかっこいいイメージのガラスブロックとは異なり、不透明と柔らかさを兼ね備えたことで、使い方、組み方、触れ合い方も見直し、可愛くアップデートする。



"めがもふもふ"はサイズも3種類あり、積み重ねパーティションや壁を構成したり、家具のスケールでイスとして使ってみたり、飾りとして置いておくと音環境に貢献したり、用途は使い手により様々。組んであいまいに空いたスキマは、従来のきっちり感とは違い、ゆるい空間をつくる。



繊維によって簡単に着色をすることも可能になり、かわいいカラフルさも表現できるようになる。色合いもビビットでは無く、パステルベースで仕上げることで、テクスチャを失うことはない。透明感を失うことによって得れるメリットは、既存の概念とは違う在りかたを示してくれる。



紀元前2000年前がルーツのガラス繊維は、19世紀後半布などに混ぜて使う実験などで注目を浴びたが、透きとおった概念とはかけ離れ人々を失望させた。しかし、かわいいというキーワードとミックスすることによって、ガラスとブロックの在り方をもう一度ゼロから考える。